

手記

悲惨な代償

北海道 竹島 秀雄

一、生いたち

大正十年十月二十五日、私は北海道岩見沢市、農業をしていた竹島鯉三郎の五男として生まれた。生来小柄の弱い体質であった。

家の周囲は一望千里の水田地帯で、西の空を真っ赤に染めた太陽が、石狩平野の地平線に沈んでゆく。

父の話では、祖父は尾張名古屋の花長村で、近隣十七カ村を統括する名字帯刀を許された名主であったらしい。明治維新の大変革で家計傾き北海道に移住した

が、その開拓の苦労は並大抵のものでなかったという。

昭和三年四月、岩見沢志文尋常高等小学校に入学した。高等科の課程が終わるころ、東京で一部の陸軍将校による二・二六事件が起きた。この後、日本にはファシズムが台頭し軍部独裁体制となり、不幸な戦争へと導かれていく。

昭和十一年三月、八年間の学舎を巣立つと、家庭の事情で進学できない私は、地元の志文郵便局に日給五十銭の臨時職員として就職した。

電話の普及していない時代であったから急ぎの用事は電報になり、それも夜間の着信が多く、辛い二十四時間体制の勤めであった。

昭和十二年七月七日、今の中国北京郊外で一発の銃

声から蘆溝橋事件が発生し、日支事変に発展していった。

志文郵便局に入って三年目、やっと札幌通信講習所の試験に合格し、昭和十三年十二月一日同所に入學した。札幌はアカシアの都と呼ばれ、航空燈台の夜の光芒に映える町のネオンは美しかったが、既に日本は戦時体制で、管間少佐の軍事教練、実弾射撃訓練等も初めて経験した。修学旅行は東京、日光、鎌倉など美しいバスガールの案内で楽しかった。

昭和十四年七月二十三日、「小樽郵便局へ配属ス札幌通信局」の辞令を受けて、卒業式が終わると私は四人の同期生と一緒に小樽に赴任した。

小樽は海と山が調和した景色の美しい港町である。先輩は親切で勤めは楽しかった。そんなある日、当直の夜、先輩から「今戦争を起こしているのは日本の軍閥と財閥だ、だから俺たちの生活は苦しいんだ」と言われた。私は初めて聞く話にびっくりしたが、事実戦時体制下の食糧統制で空腹を感じることが多く、給料は下宿代を払うのがやっとで、そのころ私は満州

にいる兄に、国内の世情や生活苦などの便りをときどき書いていた。

陸軍獣医部将校の兄は、私が反戦的危険思想に染まることを恐れ、厳しい忠告の便りに「今からでも遅くない、望むなら学校に行ってくれ、学費は自分が父に送る、父には直接自分が手紙を書く」と言ってきた。進学のを夢を捨てきれなかった私は、この職場に去り難い思いもあつたが、小樽に最も近い倶知安町に新設された農学校に受験の願書を出した。昭和十六年四月、私は北海道庁立倶知安農業学校に入學した。ところが私はこの年、徴兵検査であつた。体が小さいので不合格と思っていたが、第三乙種になった。

昭和十六年十二月八日、日本はアメリカのパールハーバーを奇襲攻撃し宣戦布告した。

二、召集令

「第三乙種 竹島秀雄 第二乙種ニ編入ス 昭和十七年六月十日 青森電信四聯隊ニ入隊ヲ命ズ」。昭和十七年五月二十五日、「臨時召集令状」が岩見沢の父に送達された。

「嗚呼われ過てり」、絶望感が脳裏を走る。すべてこれで終わりだ、勤めていれば勤務年も通算され給与も出るが、どちらも駄目にしてしまった。絶望した人間の行く先は死だ、公然たる自殺の場所を自分は戦場に求めよう。心に決めた私は国鉄俱知安駅頭で万歳の歓声に送られる中、「俺は泣くぞ」と叫ぶと滂沱と流れる涙を同級生に贈られた寄せ書きの日の丸の旗でぬぐいながら、別離の言葉を述べた。

小樽の友達とも別れて、一人わが家の水田の畦道にたたずみ、もはや国家という絶大な権力によって私の自由は完全に消滅したことを知り、やむなく「軍人勅諭」の暗記に努めた。

父母には今度の軽率な行動を心からわびながら、兄妹等に最後の別れを告げ、「祝 出征」ののぼりを持った近所の人達と地元の神社に参拝して、志文駅頭で部落会長の祝辞に型通りの答辞を述べると、万歳の声に送られて一路青森に向かって車中の人となった。

折から降りだした雨は激しい雷鳴をとどろかせ、鋭い稲光が車窓を射る。それは、あたかもこれからの私

の運命を暗示しているようであった。

第一中隊に入隊すると「服が合わなかったら体を合わせろ」と理屈に合わない被服の支給を受けて、最初の総員点呼に整列した。「この中に軍人勅諭を全部言えるものはおるか」と中隊長の質問に私は手を挙げたが、他には誰もいなかった。

軍人勅諭の五箇条は建前だけで、軍隊とはあまりにも一般社会とかけ離れた多くの矛盾と非常識に満ちた封建的社会で、野蛮な暴力的鉄拳制裁が日常茶飯事に行われている。

そんなある日、「中隊長殿のお呼びだ」と班長に連れられて中隊長室に入ると「ああ君か、竹島大尉は君の兄さんか、君のことをよろしく頼むと便りが来ている」。中隊長が見せてくれた白い封書は見覚えのある兄の筆字で、その心遣いがうれしかった。

電信隊の一期検閲は六カ月であるが大戦中で四カ月に短縮され、通信行動の訓練は夜間に及んだ。十月に入り厳しい一期検閲が終わると急にびんたの数は減った。

三、最前線

「昭和十七年十月二十五日 北海守備隊司令部ニ転属ヲ命ズ」、私の誕生日であった。

中隊長に兄の手紙がきてから私に目をかけてくれた班長が転属になり、私もその編成に加えられた。この司令部は峯木少将が司令官となり札幌月寒二十五連隊で新しく編成され、十月二十九日、札幌から小樽を出発した。途中姉の嫁いだが豊平橋のたもとにあったが、声をかけることもできなかった。

夕方、見送る人の旗の波もなく、司令官以下私たちを乗せた輸送船は、ひそかに小樽港の岸壁を離れた。船尾の対潜監視哨に立った私は、小樽の街に最後の別れをつぶやきながら、遠ざかるともしびをじっと見つめていた。

北千島からはアメリカの潜水艦攻撃を警戒し三隻の駆逐艦に分乗した。水兵さんから「司令官を送ったら小樽に上陸する」と聞いた私は、そっと父に手紙を書き、その水兵さんに頼んだ。

十一月十日夜、無事キスカに着いた。その浜には日

の丸を付けた戦闘機が幾つも残骸をさらしている。その頃アメリカ軍は、こんな文章を印刷した桐の葉を空からまいていった。「桐一葉落ちて天下の秋を知る」春再び来たる前、降るアメリカの爆弾は桐の落葉する如く悲運と不幸を来すべし」。この予言どおり毎日激しい空爆と艦砲射撃で島の山容は変わっていった。

昭和十八年五月十二日早朝、キスカ島上空を通過したアメリカ軍機は、大挙アツツ島を襲い、降伏勧告文をまき銃爆撃を繰り返すと、戦艦、空母以下三十余隻の大艦隊で、二万余の大軍が山崎大佐以下二千五百人の守備するアツツ島に上陸した。激闘十七日、衆寡敵せず食糧弾薬も既に底を突き、刀折れ矢尽きた山崎部隊は、五月二十九日最後の総攻撃を敢行して、従容として死に赴いた。

アツツ玉砕後のキスカ島は完全に補給路を断たれ、アメリカ軍の海空からの攻撃は昼夜の別なく熾烈を極めていた。そんなキスカ部隊に一大奇跡が生まれようとしていた。

昭和十八年七月八日、「アリュエーションにある部隊

を後方地区に撤収すべし」との命令が大本営から発せられた。作戦開始は七月十一日と決まったが、アメリカ艦隊の嚴重な監視に加え、霧の状態が悪く再三繰り返し延期されたが、七月二十六日夜、天佑か、濃霧の中でアメリカ艦隊の同士討ちがあり、キスカ島封鎖に一瞬の隙が生じ、日本軍救出に向かっていた第五艦隊より二十九日早朝「二三・〇〇入港予定」の無電あり、全部隊キスカ湾に集結した。奇しくもこの日はアツ玉砕の命日であった。

キスカから撤退した部隊は、八月十七日、北千島第一守備隊に編入され、九月二十五日、北海守備隊司令部は解散して、通信班は司令官以下幕僚と別れ、北千島第一通信隊に転属した。

北千島第一守備隊はその後第九十一師団となり、柏原ではこの師団司令部の駐屯と北洋漁業基地の日魯漁業の缶詰工場の女子工員五百人を含む二千人の従業員等が働いていた。

キスカ撤退後の北千島は名実共に北の最前線となり、アメリカの海空からの攻撃も一段と強化され、こ

れに対応する地下壕の陣地構築、半地下兵舎の改築移転、燃料、食糧の自給確保、対戦車肉薄攻撃訓練などの日々となった。

昭和十八年九月八日、早くもイタリアは連合国に降伏し、三国同盟の一角は崩壊して、翌年十一月七日、スターリンは日本を「侵略国」と呼び、明けて二十年四月五日、ソ連は日ソ中立条約の破棄を通告してきた。続いて五月七日、ドイツもまた連合国に降伏したのである。

四、終戦

昭和十九年に入り、南方各戦線の戦況は急速に傾き、北千島も海空からの攻撃で小樽からの海上輸送は寸断された。無線機のダイヤルを回せば「アメリカの声」が昔懐かしい歌謡曲を流しては日本の敗退を連日放送していた。

日ソ中立条約の破棄とドイツの無条件降伏で、北千島占守島の対岸カムチャツカ半島のソ連との関係は急変した。

アメリカ放送はポツダム宣言の受諾を再三要求し、

八月六日には広島に原子爆弾投下、続いて九日に長崎にも投下した。更にこの日は、ソ連が対日戦に参加してソ満国境と樺太の国境を越えて侵攻していると放送していた。

昭和二十年八月十五日、天皇は「ポツダム宣言」受諾の「終戦の詔書」を發布された。

ところが、三日後、八月十八日午前二時三十分ころ、突如ソ連軍は占守島国端崎に上陸してきた。日本軍は何故今ごろソ連軍が侵攻してきたか理解できず、北部軍に「緊急事態報告」を打電したが、北部軍からは「自衛戦に移行せよ」の簡単な命令で、やむなく北千島兵団は一万余のソ連軍を迎え撃つ死闘を展開した。激しい日本軍の反撃にソ連軍は千人からの死体を放置して一時退却したが、日本軍も被害続出し、柏原の通信隊にも自決用の手榴弾が配分され、明日は占守島に進撃することになった。その日、北部軍から「ソ連の武装解除に応ぜよ」の命令で、八月二十三日、現地軍との間に停戦協定が成立した。

かつて北のラバウルを誇った北千島兵団は、五万の

大軍と優に二年分の食糧と重装備の火砲弾薬類を温存しながら、むなしくソ連の軍門に下った。ソ連軍は、乗馬姿の指揮官を先頭に自動小銃にベレー帽を斜めにかぶり、季節外れの汚れた長い外套を引きずり、一見疲れ果てたみすぼらしい隊列であった。

五、連行

武装解除の式が終わると将校は帯刀だけ、下士官、兵は帯剣も外されて各部隊の編成を解き、新たに千人単位の作業大隊に編成替えされると、北の台飛行場に移動を命ぜられ、四方を鉄条網で囲み「○○捕虜収容所」の看板がいつの間にか掛けられていた。

こうして道路工事、元日本軍の物資運搬等、背後にはいつも自動小銃を持ったソ連兵が付き、言葉が通じなくて殴られたり蹴られたり、時計、万年筆など目ぼしいものは強奪される者が続出したので、ソ連軍の上級将校に申し入れると、日本兵に首実験をさせ、指されたソ連兵は事実の確認もなくその場で射殺されるのを見て、私たちは被害を申し出ることもできなくなつた。しかしこうしたソ連兵の行為はますます増えて日

常茶飯事になった。

九月半ば過ぎごろ私たち大隊に乗船命令がきた。

「日本は敗戦で物資が不足しているからできるだけ物資を持って」と言われて、着替えや毛布など、大きな荷物を持って港に来たが、その扱いはひどく、我々は荷物と同じに、もっこに入れてはクレインでつり上げ船倉に投げ込むように詰め込まれて、足を伸ばすこともできないありさまで、人の手や足を踏んで甲板の仮設の便所にゆくのがやっとであった。

冬の近い北洋の波は荒く船足は遅い。数日後やっと北海道の山影が見えてきて、明日は小樽に着くと信じていたところ、船は左に宗谷岬を見ながら右に回ると樺太の大海に入港した。しばらく停泊したのも今度は間宮海峡を真っすぐ北上すると、甲板上のソ連兵の態度はがらりと変わり、将校だけに許していた帯刀も取り上げると、今度は通訳を通じ「アメリカ軍が三日前小樽に上陸してこの船は入れない、一時お前らを預かる。スターリン元帥は日本がソ連とともに強くなることを望んでいる」と、こんなメッセージを発表してい

た。

間宮海峡をしばらく北上すると今度は左に曲がり、とある港に停泊した。「ダワイ」とソ連兵にせかれ暗い岸壁に下ろされた。「ここはどこか」と聞くと「ニコライエフスクだ」と言う。するとここは第一次世界大戦後ロシアに革命が起きたとき、日本が米英仏と共同で反革命軍を支援してシベリア出兵のとき発生した「尼港事件」のあった所である。

六、収容所

収容所に着くと「ダワイ」の一言で私たちの背負ってきた荷物はその場で全部没収されてしまった。屋内に入ると、木製の二段式の粗末なむしろ敷きの長い寝台が部屋の端から端まで無造作に二列三列と並んでいるだけの、他に何もない大部屋で、一人一枚支給された日本の毛布を敷き、着てきた防寒外套を頭から被って着のみ着のままに体を寄せ合い横になるだけ。この木の二段式寝台の上でこれからの長い抑留生活が始まったのである。

着替え洗濯、洗顔、入浴の際の水も施設もなく、下

着には白い虫がわき、天井からは南京虫が夜ごと捕虜の肉体の血を吸いにおりてくる。

冬のシベリアの落日は早い。雪の日、風の日、嵐にも、作業は休みなく早朝から日がとっぷり暮れるまで、実に労働管理は厳格である。実働八時間が原則と思うが、その作業所に行く所要時間や、食事の支給を受けるために寒い屋外で並ぶ時間の浪費などが甚だしい。

ニコライエフスクの収容所は数丁区間を板塀と鉄条網で囲み、北千島から二千人、樺太と満州から各一千人、計四千人をこの一画に収容し、北千島部隊の桑田中尉をソ連軍は大佐に任命し、連隊長として日本軍の責任者とした。将校は別棟に収容し、急な欠員補充のための補給小隊を置き、日常作業は二十五人単位で下士官以下二十四人に将校一人を付け、ソ連軍の指示により各作業所に配分された。

毎日の作業割りは補給小隊の益井少尉が担当していた。四千人の人員に食事をさせ、定刻までに現場に行くには午前三時に起きて長い列を待ち、やっと飯盒の

蓋に一杯のスープとわずかな食物に昼食用の一切れの黒パンをもらい、今度は収容所の営門前に並ぶのである。

ソ連将校は人員の数え方が遅く、四人四列と見やすく並んでも列の線に一人でも出遅れがあると「ストーイ」がかかり、また最初から数え直してである。特に総員点呼などは十×十と百人単位で並んでも数時間必要であり、毎日の出発待ち時間が大変であった。

シベリア特有の寒波は連日零下三十度で、三十度以上は作業休みと聞いたが実際はそんなに甘くなかった。

七、重労働

補給小隊の私はしばらく薪山伐採作業に従事していたが、今度はアムールの氷上作業に回された。水漬けになっている川船を氷の上に揚げる仕事で、陸と違い氷上を吹く風はひとときわ冷たく肌を刺す。しかも作業器材は粗末な先の尖った鉄棒と木の枝に鉄板を打ちつけたようなスコップで、鉄棒は厚い手袋をつけているので氷に穴があいた途端に滑ってストーンと川底に落

ちていった。すると現場監督は激しくののしり、作業能率のパーセントを下げた。作業能率が一〇〇%以上になると増食になったが六〇%以下は減食の罰を受けた。

やっとこの仕事が終わると今度は水道工事で、メートル以上も凍結している表土を道路に沿って幅五十センチ、深さ百五十センチの側溝を掘る作業も道具はやっぱりこの鉄棒と鉄板スコップで、硬く凍りついた土は鉄棒の手にピンとしびれる衝撃がくるだけで容易に掘れない。真冬日になると顔は防寒帽で包んでいるが鼻の頭と手足の指が凍傷にかかりやすく、ソ連軍は「日本兵は仕事を休むためわざと凍傷にかかる。以後凍傷にかかったものは営倉に入れる」と厳しい通達を出した。

そのうち私は幸いにも今度は屋内作業に回された。なめし革作業の仕事で、アザラシの皮が大半で屋外倉庫にびっしりと積まれていた。現場監督一人と二人の女性に指導され、初めは汚い仕事で気持ち悪かったが、そのうち皮から削った脂肉を飯盒で煮詰めスूप

にすると、少量のふすま汁に一切れの黒パンで飢えている者には貴重な食材となった。けれども衣服が皮の脂で汚れ、異様な臭気を発散させるので皆に嫌われたが、この脂肉を持ち帰り分けてやると、すごく喜ばれるようになった。

そんなある日、私はうっかり上着を脱いで外へ出て、ソ連兵に帯革を取られてしまった。キスカで艦砲射撃の折この帯革と剣差しが私に当たった砲弾の破片を受け止めてくれたものであったが、銃剣を突きつけて強奪された。

この仕事にも大分慣れてきたある朝、激しい喉の痛みと高熱で私は医務室で軍医の診察を受けると、ソ連の女性軍医はすぐ入室を命じ、間もなく市内の本院に送られた。その夜病室に回ってきた金髪の看護婦は美しかった。

数週間後、病気がよくなった私は保育班に移されて、たまたま亡くなった人を死体置場に運んだが、すさまじいその部屋に一瞬息をのんだ。そこには数十人の凍結死体が全裸のまま無造作に積み重ねてあった。

死体は全部解剖されて、終わると山の麓に埋められる。

「かわいそうだが吹雪がひどく、土が硬くてやつと二十〜三十センチ掘って土と雪をかけてきたが、浅いから山犬や狼が掘るかもしれない」。死体を埋めてきた使役の友の話である。これがニコライエフスクで、飢えと寒さで異境に果てた日本兵の末路であった。

保育班を退院すると、厳寒のシベリアにもようやく春が来て、アムールの氷が音を立てて割れると満州から大量の占領物資が黒竜江の対岸から毎日運び込まれてきた。全部日本製品で、軍需物資のほか米、麦粉などの食料品から衣料、工業製品に工場の設備機器類まで、中国領となった旧満州が空っぽになるほどの物資が毎日荷揚げされて、この作業は二十四時間三交代制で昼夜の別なく続けられた。

八、ダモイ

収容所生活も二年目になると、次第にソ連軍との折衝要領に慣れて、少しずつ待遇も改善され、衣服の消毒やシャワーを浴びることもできるようになった。不

自由した紙もノルマ達成報賞金で新聞を買い、ハバロフスクの『日本新聞』の配布もまた貴重な情報紙であった。ソ連軍指導による民主グループも生まれ、それに荷揚げ作業中の麦粉、砂糖などをこっそりと持ち帰ることも覚えたが、ある日、警備のソ連兵に頼まれた砂糖を袋に詰めての帰り、身体検査のことで現場監督とソ連兵が口論になり、その監督が二人も射殺されたこともあった。夜は日本人の連んでいる肩から砂糖や麦粉を盗んでゆくロシア人も随分いた。

このニコライエフスク市には、大正九年五月に起きた「尼港事件」で革命軍に殺された多くの日本人の慰霊塔がまだ残されていたが、哀れな四千人の日本軍の姿を、この霊はさぞ嘆いていたことであろう。

昭和二十二年五月上旬ごろ「ダモイ」の命令が出た。ソ連軍将校が直接各隊から抽出して自ら引率して水車の川船に乗せてハバロフスクにきたので、見知らぬ者同士の烏合の衆となり、指揮者のいない部隊はスーブ一杯の配給を受けるにも要領のよい強いもの勝ちとなり、ハバロフスクでは日本新聞記者が「この部隊

は民主教育ができていないから再教育のため奥地へ送る」と言われ、私はやむなく「部隊には指揮者が必要だから指揮者を決めてほしい」と要望した。

こうして青年行動隊が作られ、私はその執行委員と給与係を命ぜられ、更に朝夕の点呼時には「インターナショナル」と「赤旗の歌」を指導することを指示された。

私は「心ならずもこうした役を仰せつかったので、祖国に帰る日まで我慢して私に協力してほしい」と懇願しながら、ソ連軍の要求人員を差し出し、赤旗やインターナショナルの歌を指導しながら、ようやく長距離のシベリア鉄道の貨物列車に乗せられナホトカにきた。ここでも数週間、非民主的部隊と見られないように随分と気を使った。

「スターリン大元帥」あての感謝文を贈り、船に乗ると、今度は本当に日本の船である。心身共に疲れ果てた私は、船に乗るとすぐ発熱して医務室に入った。

翌朝目を覚ますと船の上で「民主グループの執行委員に日本海の水を飲ませろ」と騒いでいた。私は医務室

にいたのでこの査問は受けなかったが、もし受けたら「今こうして帰還できるのは、君たちが僕を信じて協力してくれたからではないのか」と私は胸を張って反論するつもりでいた。

九、復 活

日本は昭和六年の満州事変から十五年の長い戦争を最後に、六十数万人という大量の抑留者を出し、六万余の死体をその荒野にさらした。満州にはソ連軍の侵攻で多数の婦女子が犠牲になり無残な戦争孤児が遺棄された。生まれつき弱い体質の私がこの苦難の環境を乗り切ったことは、むしろ奇跡に近い。

「武士道というは死ぬ事と見付けたり」とか「生を欲すれば死し、死を必すればこれ即ち生きる」のたとえあり。人は苦境にあつてこそ、その逆境にあえて抵抗する強い精神力が必要である。私はキスカ島からの生還と、このシベリアの体験が、戦後生活の強い自信となり現在に生きている。

昭和二十年六月、ソ連は日本から米英に対する和平交渉の仲介を受けて、その回答は非情にもわが国に対

する宣戦の布告であった。それなのに、この太平洋戦争でソ連に支払った代償はあまりにも過大に過ぎる。それは正にポエニ戦争でローマに滅ぼされたカルタゴの運命を世界に再現してみせた観がある。

「国破れて山河あり……」。荒廃した国土、すさまじく切った人の心、混迷の世相の中に帰還した私であったが、わが家の農地は既に占領政策で解放され、復員軍人で失業者は巷にあふれていた。そんなときマッカーサー司令官は警察法を改正し警察官の緊急募集を発表した。

昭和二十三年一月十日、私は祖国再建の礎になろうと決意して警察官を拝命した。出身地の岩見沢市から道内八警察署を転任したが、戦後の混乱期で治安状態最悪のとき、小さな体でこの勤めは決して楽でなかった。特に小樽では火災現場で砲弾が破裂し顔面に受傷したが、この年は偶然にもシベリアで知り合った入隊前に易者をしていたという人が予言した年であった。

昭和二十五年六月に勃発した朝鮮戦争の特需景気の影響もあったが、戦後奇跡の復活を遂げた日本経済

は、著しい車両の急増を招き、交通事故死者が増加したので、「交通事故死絶滅作戦」の特別取締まり等、長期間交通戦争との対決であった。最後は旭川の交通裁判所で定年を迎え、昭和五十四年四月任警部で退職してから、北海道石狩支庁に交通安全係嘱託として昭和六十二年三月停年解職まで交通安全運動（教育）で奉仕させていただいた。

終戦時北方四島を不法占拠したソ連は、一九九一年十二月二十五日、ゴルバチョフ大統領の辞任で崩壊したが、長い間培われた社会主義的考え方は変わらず、人道的支援は要求するが、北方領土問題は今も進展していない。

太平洋戦争ではドイツと違い日本はソ連に何の損害も与えていない。しかも抑留されてからは独ソ戦で荒廃した国内の復興に最善の協力をしてきた。厳しく訓練された教育程度の高い日本軍はソ連の復興には最高の労働力であった。敗戦の混乱のなかで「ダモイ東京」を信じて過酷で惨めな抑留生活を強制された怨念は、今も忘れられない。この生活体験を経て今日まで

生きてきたあの頃の若人も、既に古希を過ぎれば次第にこの世を去ってゆく。

人間の命は自分のものであって自分のものではない。宇宙の生命体に支配された、はかない一瞬の生命である。この悲惨な事実も、それを語る人が亡くなれば間もなく忘却の彼方に消えてゆくであろう。

人の世は 宇宙の命 一呼吸
生きて百年 一瞬の夢

【執筆者の紹介】

大正十年十月二十五日 北海道岩見沢市、竹島鯉三郎

の五男として出生

昭和十一年三月 志文尋常高等小学校卒業

四月 志文郵便局に臨時職員として就職

昭和十三年十二月 札幌通信講習所に入学

昭和十四年七月 小樽郵便局に配属

昭和十六年四月 北海道立俱知安農業学校に入学

昭和十七年六月 召集により青森電信四連隊に入隊

十月 北海守備隊司令部に転属

十一月 キスカ島に到着

昭和十八年九月 北千島第一通信隊に転属

昭和二十年八月 占守島にて武装解除

九月 占守島出発、ニコライエフスク着、

上陸収容さる

昭和二十二年七月 ナホトカ出航、舞鶴に上陸復員す

る 出生地岩見沢市に帰る

昭和二十三年一月 岩見沢市から警察官を拝命

昭和五十四年四月 定年退職

定年退職後は北海道石狩支庁交通

安全係に嘱託として勤務する

昭和六十二年三月 解職

平成元年八月 資料収集調査に際して大変協力をして

頂きました

(北海道 森 英一)